

ワシントン D.C. (8月1日～8月8日)

- 8月1日(日) ワシントン D.C. 到着
 - 8月2日(月) スカベンジャーハント・国務省訪問
 - 8月3日(火) 日米安保フォーラム・「50年後の日米」スペシャルトピックディスカッション
 - 8月4日(水) スミソニアン博物館見学・日本大使館主催レセプション
 - 8月5日(木) シャトーヴィル訪問・タレントショー
 - 8月6日(金) 連邦議会見学・ホームステイ
 - 8月7日(土) ホームステイ
 - 8月8日(日) ニューオリンズサイトへ移動
- *宿泊場所 George Washington University Potomac House

■サイトテーマ

アメリカの「力」を探る

～国家としての歩みと未来～

ホワイトハウスや連邦議会など連邦政府三権の最高機関をはじめとして、合衆国を動かす英知と情報が集まるワシントン D.C.。イラク派兵から、金融財政政策や産業貿易政策の決定まで、国際政治、経済の全てに影響を与えるこの地はいまや、米国内はもとより世界の政治、経済の中心たる都市である。ワシントン D.C.での活動を通して、学生達は他国にはない「アメリカの力」を改めて認識するだろう。未来志向の「日米」関係を知るために、強大な国家「アメリカ」とは何かを、対話を通して探りたい。第2サイトでは、政治、経済…様々な分野の第一線で活躍する方々との対話を通し、アメリカ合衆国の「力」を直に感じていきたい。

■活動の指針と目標

- ・日米関係「NEXT50」を考える。
- ・国際機関および、アメリカ政治の中心地において各種フィールドトリップを行うことを通して、参加学生の知見を広げる。

■具体的活動

- ・安保フォーラム：
 - Dr. Michael Green – Center for Strategic and International Studies (CSIS) Senior Adviser and Japan Chair
 - Dr. Patrick Cronin – Center for New American Security(CNAS) Senior Advisor and Senior Director of the Asia-Pacific Security Program以上両氏による講演および Q & A
- ・日米学生による沖縄基地問題、日米安保 50 年間についてのプレゼンテーション
- ・国務省訪問：アメリカ外交政策についての講演
- ・ホームステイ

8月3日

第62回日米学生会議 安全保障フォーラム
スペシャルトピック NEXT50の日米関係

本年度会議では、ワシントン D.C. において新安
保 50 周年の年に学生として NEXT50 の日米関係
を考えようと言う意図のもと、安全保障フォー
ラムを開いた。本フォーラムに備え、日本側学生は
事前活動にて学生有志で沖縄研修を行い、それを
踏まえプレゼンテーションなどを行った。

・安全保障フォーラムプログラム

1. 以下の両氏による講演および Q & A

-Dr. Michael Green - Center for Strategic
and International Studies (CSIS) Senior
Adviser and Japan Chair

-Dr. Patrick Cronin - Center for New
American Security(CNAS) Senior Advisor and
Senior Director of the Asia-Pacific Security
Program

2. 日米学生による沖縄基地問題、日米安保 50 年
間についてのプレゼンテーション

1. Dr.Green と Dr.Cronin による講演

両氏ともに日米関係の分野では大変ご高名な研
究者でいらっしゃるが、お忙しい中日米関係を考
える若者のためにと無償で講演を引き受けてくだ
さった。

通常は大変学術的なお話に偏りがちな講演内容
も、我々学生の未来を考える熱意に合わせ、いか
にしてこれからの時代を考えていくべきなのかと
いうより幅広い視座に基づいたご講演を頂いた。

グリーン氏は、日米関係の歴史を説明し、新渡
戸稲造の「太平洋を繋ぐ橋になりたい。」という
発言から、国際連盟への同氏の関わり、国際人
として、自らの足で実際に外国を見ることが国際
人には必須の条件だと発言したことなどを紹介した。
その上で日米両国間の相互理解には日米両国の
人材交流が欠かせないとおっしゃられていた。現
在の日米関係についても自民党から民主党への政
権交代について説明が行われ、鳩山首相時代から今

に至る日米関係は「危機 (Crisis)」ではなく「漂
流 (Drift)」であるが、日米関係が「漂流」した経
験は歴史から見てもこれが初めてではないものの、
多くのチャレンジが今回は潜んでいるとおっしゃ
られた。

その他、日本では 75% の国民が日米同盟を支持
しており (特に若い世代で顕著)、米国においても、
英国、カナダの次に信頼がおける国として日本が
挙げられている事例から、両国民のそれぞれの国
に対する信頼度がいかに高いか、日本との FTA
締結についてもその期待度の高さが伝えられた。
また、米国は世間で言われているように中国との
G 2 であるとか、日本との関係をダウングレード
するなどはないと断言した。

クローニン氏は、「ここにいる皆さんが 10 年、
20 年、30 年先の日米関係を動かす人材となっ
てほしい」との期待を述べてくださった。クロー
ニン氏は日米関係を理解するにあたって、まず我
々が住んでいるこの世界がいかに危うい世界であ
るかを理解する必要があるとおっしゃられた。国
家間のリスクのみならず様々なアクターが原因と
なるリスクが現代には多く潜んでいるという事だ。
そして、現代の危機として伝統的な危機ではなく、
「グローバル・コモンズ」に対する危機、特にサイ
バースペースの問題について指摘された。サイ
バースペースの脆弱性については北朝鮮が韓国を
サイバー攻撃した事例もあげられた。また、将来
については、気候変動や、自然資源獲得競争など
の「Natural Security」がより大きな問題として各
国が取り組まなくてはならなくなるだろうとお
っしゃられた。

2. 日米学生双方による日米関係についてのプレゼ
ンテーション

このセッションでは、日米両国学生の代表がそ
れぞれ日米関係について考えることを発表した。
日本側からは、片山、栗原、竹内、森田の 4 名が
事前活動での沖縄研修を踏まえ、日米関係にお
ける沖縄問題の重要性とその解決について、単に国

第3章 本会議・サイト活動

際政治的な視点からのみならず直接地元の大学生や辺野古の基地移設反対運動をする方々と対話をした上で、沖縄基地問題に対していかに両国がコミットしていくべきなのかを語った。また、アメリカ側代表として William Coremin と Paul Horak がサンフランシスコ講和条約以来の日米関係についてのプレゼンテーションを行うと共に日本の存在の重要性についてアメリカ人として発表を行った。

フォーラム終了後には寮において、全学生が参加者が自ら選定した8つのスペシャルピックテーマに分かれディスカッションを行った。東アジアの安全保障における中国の存在、日本における靖国問題など、日米関係の次の50年を考えるにあたって重要な要素について多くの学生が議論を交わし、日米学生会議として何が出来るのかを両国学生同士で確認し合った。

8月4日

日本大使館レセプション

ワシントン D.C. に位置する日本大使館旧公邸にて在米日本大使館様によりレセプションを開催して頂いた。レセプションでは在米国日本国大使館の林肇公使より2週間が過ぎた日米学生会議学生全体への激励と共に、昨今内向きと称される日本人が多いと聞く中で、JASC の日本側学生を見て大いに日本の未来に安心したとのお言葉を頂いた。本レセプションには在米大使館の職員の皆様を初めとし、アメリカ側のアラムナイの方も多くいらっしゃっており、本会議中にて始めて多くのアラムナイの皆様と交流し、JASC の昔話等を聞く機会となった。

8月5日

シャトーヴィル訪問

バージニア州郊外に位置する、1997年に若者の芸術活動を支援するために設立されたシャトーヴィル財団を訪問し、その本格的な劇場にて日米学生会議の文化であるタレントショーを行った。

これは、個々人が自らまだ隠している才能(音楽、ダンス、マジックなど)を全員の前で披露することを通して、より深く自分を知ってもらうための企画である。本年は日米の学生合同での寸劇など楽しい出し物が催され、両国学生の絆を深めた。



写真：シャトーヴィルの劇場での集合写真

8月6日～8月7日

ホームステイ

日米学生会議では毎年、学生同士の交流のみならず両国の相互理解に資する活動として、現地で暮らす方々の下でホームステイをさせていただいている。

本年はワシントン D.C. サイトでホームステイが行われ、実行委員を除く参加学生はバージニア州郊外の17の家庭にてホームステイを体験させて頂いた。

参加者のホームステイ体験記(高橋 亜矢)

ホームステイの二日目では、JASCer のあきえ、ゆりえと一緒に、一日ホストファミリーの方々と楽しく過ごしました。

午前中は、ホストファザーに郵便局やスーパー、近所で毎週行われているファーマーズマーケットに連れて行って頂きました。スーパーでは品数の多さと大きさに驚き、ファーマーズマーケットでは地域の農家で作られている色鮮やかで新鮮な野菜や果物、バターやチーズなどの乳製品やワインなどが売っていて、試食をしながら現地農家の人のお喋りを楽しみました。ちょうどこの日が母の誕生日であったため、母へのお土産にヴァージ

ニア産のワインを買うこともできました。

午後には、ホストファミリーの方と一緒に出かけ、本屋やショッピングモールに連れて行っていただきました。夕方からは、日本語を学んでいるというホストシスターの友人たちが3人遊びに来て、一緒に夕食を楽しみ、アイスクリームやクッキーを食べながら日本の文化やアメリカの大学生活について夜遅くまで語り合いました。

ホストファミリーの方には、本当の家族のように歓迎していただき、日米学生会議の忙しいスケジュールを離れ、久しぶりにのんびりとした休日を過ごすことができ、忘れられない思い出の一つとなりました。



写真：ホームステイでのワンシーン

■成果と考察

・日米関係「NEXT50」を考える。

新日米安保50周年の本年、次代を担う学生としてこれまでの50年を振り返ると共に、次の50年を考える機会を本開催地では設けた。本年度会議では、任意の事前活動として日本側参加者のみで沖縄研修を行ってきた。研修内では、米軍基地や米国総領事等の米国の声、沖縄県、名護市長などの行政の声、普天間基地の辺野古移設反対運動家の方々や、地元学生等の地元の声と多面的にこの沖縄基地問題をとらえてきた。その上で本開催地においては「安保フォーラム」を開催し、これまでの日米関係と今後の展望をマイケル・グリーン氏、パトリック・クロニン氏に講話いただいた後、日本側学生、アメリカ側学生による沖縄基地

問題に関するプレゼンテーションを行った。またその後、このフォーラムを踏まえてスペシャルトピックディスカッションとして7つの切り口から「NEXT 50」参加学生同士で未来を考える機会を設けた。一連のプログラムを通して、両先生から、次代を担う若い学生の力こそが重要とのメッセージを受け取ると共に、日米学生会議として真摯に取り組むべき日米の未来に向き合う時間をしっかり持てたことは、大変貴重な機会となった。

・国際機関およびアメリカ政治の中心地において各種フィールドトリップを行うことを通して、参加学生の知見を広める。

本開催地における分科会フィールドトリップ先は多岐に渡る。(4.の各分科会の報告を参照されたい)第1サイトで議論が温まり始めた各分科会にとって、本サイトにおけるフィールドトリップで得た知識はその後の分科会ディスカッションを展開するに当たり良い刺激となった。

■サイトコーディネーター後記

【杉本 友里】

まず、日米両国側にて、DCサイトでのプログラムの計画、実施ご協力いただいた、全ての皆様、この場を借りて心より感謝の気持ちを伝えたい。そして、サイト担当として東奔西走してくれたLeah、David、同じ日本側実行委員として支えあった安川にも、特別の感謝を伝えたい。しかし、参加者それぞれに、疲労も募り、また、少々無理のあるプランの中でかなりの負担を課してしまったことについては、申し訳ないばかりだった。他の実行委員の応援と、参加者全員の協力がなければ、DCでの1週間を乗り切ることはできなかった。

このサイトの企画にあたって意識したことは主に2点ある。1点目は、首都であるDCにしかない資源や情報を活用することだ。米国国務省、日本大使館訪問や、Smithsonian周遊、各RTでの集中的なFTなど、様々な場所や人を訪れ、とにかくインプットした1週間だったように思う。

2点目は、日米安全保障フォーラムの実施だ。

第3章 本会議・サイト活動

特に日本側では、事前活動の一環として日米安保に関する勉強会や、沖縄研修の集大成の場、そして、参加者同士が将来の日米関係について真摯な意見交換をするアウトプットの場として、実施前から大きな期待と緊張を持して臨んだ。ところで、「日米学生会議」といえど、必ずしも参加者全員が日米関係に関心があるわけではない。しかし、第62回会議では、一貫してこのテーマに取り組んできたことで、大なり小なり、参加者個々人が『私たちの課題』として位置づけられたのではないだろうか。それは、結果的には「安全保障」ほど、高次ではないかもしれない。しかし、私たちは確かに、日米の学生として、日米の過去・現在・将来について議論した。もちろん結論は出ない。それでも、自分たちなりにことばを紡ぎだし、伝え、伝えられようとしたのだ。この経験が、いずれ、それぞれが描く日米関係を、個人の次元、あるいはより高次で実現するきっかけとなることを願う。

【安川 皓一郎】

アメリカ側開催時の日本側サイトコーディネーターの大変さが身にしみた経験となった。私自身にとっても不慣れな外国の地において、サイトコーディネーターとして他の誰よりも事前知識、準備をしてリードして行くという事は極めて難しかった。準備機関から連絡も怠りがちになりながらも、インターン経験で地の利のある David、いつでもフォローアップをしっかりとってくれた Leah、そして、私の代わりに多くの情報共有をしてくれた

杉本には感謝の言葉をいくら述べても足りない。JASCer 独特のフランクさのおかげで第1サイトを経て既に仲良くなっているとはいえ、平穏なインディアナから大都市であるワシントン D.C. へ移動してきたの緊張感は少なからず多くの日本側学生から感じられた。そのような中でも、数多くのプログラムをしっかりとこなせたことは重要なことであり、また、多くの学生にとってホームステイ経験の場となったワシントン D.C. サイトが思い出に残る事を強く願っている。

最後に、在米日本大使館でのレセプションにお招き頂きました林肇公使、また本サイトでの重要な企画である安保フォーラムに際し、講演者の先生方を探すのに本会議直前になってご助力頂いた USJI (U.S.-Japan Research Institute) の安永修章様等日本の学生が日米関係について考えることを助けてくださった多くの在米の日本人の皆様には感謝の辞を述べたいと思います。本当にありがとうございました。



写真：ワシントン D.C. サイトコーディネーター
(左から David・杉本・Leah・安川)